



2015年9月26日（土）
13:30～17:30
三原市中央公民館

■ 当日のプログラム

- 13:30～ はじめに
活動の記録について
広島愛媛合同交流会について
- 13:45～ レクチャー
ゲスト：岡昇平さん
ゲスト：谷尻誠さん
「地域をつなぐ拠点づくり」
- 15:00～ トークセッション
- 15:30～ 意見交換会
「立って座ってメガホン会議！」
- 17:25～ おわりに

1 講義「地域をつなぐ拠点づくり」

今回のテーマは「地域をつなぐ拠点づくり」です。そのヒントとなるような活動を展開している、仏生山温泉旅館の岡昇平さん、SUPPOSE DESIGN OFFICEの谷尻誠さんにゲストとしてお越しいただきました。

お二人が取り組んできたプロジェクトについてそれぞれ紹介いただいたあと、参加者からの質問を交えたトークセッションをしました。



ゲスト講師①



仏生山温泉旅館番台 岡 昇平氏

1973年香川県高松市生まれ。建築設計事務所「みかんぐみ」を経て高松に戻る。本業の建築設計と家業の温泉を運営しながら、まち全体を旅館に見立てる「仏生山まちぐるみ旅館」を10年がかりで進める。

■ まちを旅館に見立てて暮らす

私は香川県高松市の郊外にある仏生山町で、建築の設計事務所をしながら、かつ元々の家業である温泉の仕事と両立しています。仏生山は菩提寺の門前町として発展し、江戸時代後期くらい建物と昭和の建物とが混在したような町並みがあります。人口は30年ほど変わっていませんが、子どもたちは少しずつ減って高齢者が増えてきて、古い建物も毎年1軒くらいずつ壊されています。

私が経営している「仏生山温泉」は、2005年に建ててちょうど10年目になります。ホールや食堂、露天風呂、中央に中庭があり、脱衣室や風呂の窓ガラスを開けると外になっています。秋祭りになると獅子舞が踊ったり、ライブをしたり、結婚式の写真を撮ったり、カレーキャラバンというチームが来てくれたりといったように、外と中が交わっています。

お風呂の中では本も読めます。お客さんが勝手に読み始めたのがきっかけで、「50m書店」という廊下を使った本屋もしています。近くでお店をやっている人たちで、年に2~3回「温泉マーケット」も開いています。イベント自体が素敵になることと、ここから何かが新しく始まることを大切にしています。

温泉をしている理由は、嘘みたいな話ですが、父が掘ったからです。家業を継ぎ、かつ設計事務所を始めようと思って、僕が東京から帰ってきたら、温泉が湧いていたという状況です。そのあと、僕自身はずっと温泉を運営しながら設計事務所をやっていて、「**仏生山まちぐるみ旅館**」に取組んでいます。まちぐるみ旅館というのは、**まち全体を旅館**という風に見立ててみることで、実際に旅館という建物はありません。カフェや食堂、物販といった役割がまちの中に点在しており、それを全部セットで考えています。

一棟貸しの「縁側の客室」という旅館をつくり、2012年から実質的にまちぐるみ旅館がスタートしました。お客さんは、到着するとカフェでくつろいで、公園を散歩し、レストランで食事し、居酒屋へ行き、お風呂へ入り、旅館に泊まり、翌朝近くのお店で朝食をとる、という過ごし方をします。目に見えた回転があると、まちの気分のようなものが変わっ



仏生山温泉旅館



ライブ演奏の様子



50m書店

てきて、そこに魅力を感じた人たちがお店を始めようと思うようになります。2014年にはお店が2軒、2015年は4軒できました。人口8000人くらいのまちで、毎年3軒くらいお店ができていくということは、かなりインパクトがあります。

できたお店をご紹介します。江戸時代からの呉服屋さんをリノベーションしたサンドイッチ屋さんがあります。オーナーさんの要望でカフェにしましたが、奥さんが趣味で焼いていたパンがとても美味しいと評判になり、サンドイッチ屋になりました。2人とも飲食店の経験は全くなく、自分の子どもに食べさせているものの延長線でモノをつくっているのです、とてもやさしい味がします。「へちま文庫」は、昔の建具工場です。基本的にはセルフビルドで、改修費用は約150万円です。「サーカス図書館」は、カフェの待合室にサーカスのことを紹介する図書館をつくりました。高松のサーカスチームの開かれた事務所として図書館にしています。カフェにとっては待合室のコンテンツが増え、図書館にとってはサーカスの紹介になるので、相乗効果が生まれています。「TOY TOY TOY」という雑貨屋は、まちぐるみ旅館が楽しそうだと言って東京から引っ越して来たメンバーがやっています。セルフビルドで3軒分の賃貸住宅を1つにつなげ、1階は店舗、2階以上は居住スペースです。「四国食べる商店」は住宅をリノベーションし、フォークリフトのパレットを使って内装をつくっています。リノベーションの場合は現場で合わせることが多く、図面はほとんどありません。

まちぐるみ旅館を始めた理由は、ここに住み続けなければならないなら、どうやってここでにやにやしながら暮らしていくかということを考え始めたからです。私はそんなに大それたことを思っているわけではありません。毎日通いたい美味しいごはん屋さんや、コーヒーを飲みながら過ごしたい居心地のよいカフェがあれば、まあまあ楽しいと思うからです。まちぐるみ旅館というのは、そういう素敵なお店を増やすための取り組みです。なぜ旅館という形式がいいのかと言うと、まちと旅館というのは元々同じだからです。衣食住の機能が、ひとつの建物に入っているのが“旅館”、エリアに分散しているのが“まち”です。

まちがもらう旅館のいいところを2つご紹介します。まず**宿泊機能と集合**です。旅館は小さな機能がたくさん集まって、もうひとつの大きな機能をつくっている場所です。それをまちに当てはめると、**まちにあるお店が集合して見える、もしくは宿泊機能が加わることで、ひとつの面としての価値観が生まれてきます。**もうひとつは、**お店をめぐる関係**です。旅館でお風呂だけ入ってごはんを食べない人がいないように、まちにその関係性を当てはめてみると、まちにある暮らしの機能を連携させ、そこに必然性を持たせることで、お店とお店を線でつなぐことができます。これらふたつによってまち自体の価値があがります。

■ 新たな店が増える「連携」のあり方

「連携」とは、関係性によって新しい価値をつくることです。相乗効



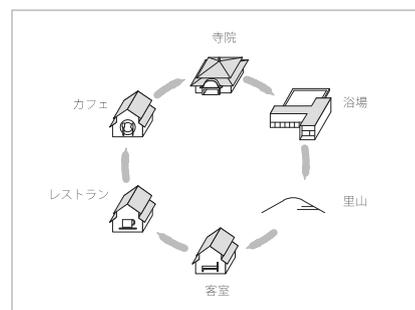
丁寧につくられたサンドイッチ



サーカス図書館



四国食べる商店



お店をめぐる関係

果もしくは相互補完です。パン屋の近くにコーヒー屋があれば両方行きますよね。これが単純な連携で、「一軸連携」と呼んでいます。これがパン屋と美容院だったら、関連性があまりないので連携になりません。連携はお互い高め合う状態、算数で例えるなら「 $1 + 1 = 3$ 以上」になる必要があります。さらに、「多軸連携」と呼んでいる考え方もあります。全ての店と店の間にラインを引くことができ、地域全体で集合した魅力をつくと、最初から連携できる状態があるので、新たな店が増えていきます。

■ 素敵なまちと、店の関係性

まちというのは元々価値が集積したもので、店は人がつくることのできる価値の最小単位です。素敵なまちには素敵な店がたくさんあるし、その集積がまちの価値です。店は必ず誰かの役に立っていて、そこには新しい交換が生まれていますから、店をやるのは自分のためではありません。そういう意味では、自分や誰かのためになりながらも、自分たちで継続的に価値を生み出していけるので、広義の公共施設と言っても過言ではありません。

まちと店のキーワードは「寄せてあげる」ということです。単純に店の数が増えただけでは面白くなりません。つまり、自分がにやにやできるお店でないと意味がない。そのためには、高いクオリティを維持しなければなりません。さらに、歩いて回れるという近さも非常に大切です。できるだけ近場に寄せて店をつくり、クオリティをあげます。

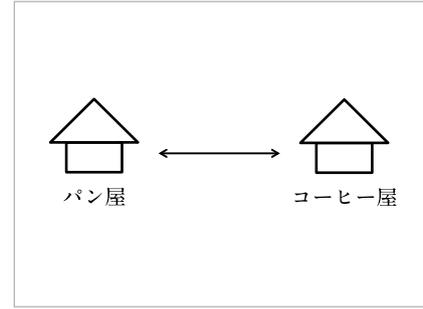
私は、観光地を目指したい訳ではありません。人が集まるのは適度でよいと思っていて、暮らしをまず優先して結果的に観光につながるのであればいいと考えています。心地よい境界があるはずなのでそこを目指していきたいです。

地域の潜在価値をつくるのは面、店をめぐる関係をつくるのは線、店をつくるのは点のことです。それぞれのレイヤーで共通した価値をつくり、コンセプトがぶれないようにしています。

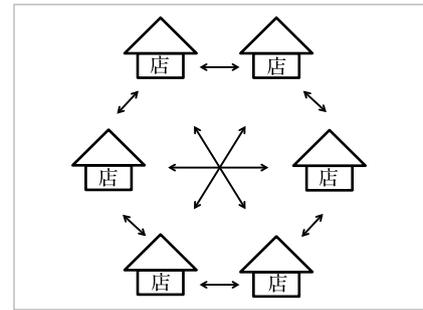
■ まちぐるみ旅館の副次的な効果

副次的な効果を4つ紹介します。まず、店と店が仲良くなり、隣の店を心地よく紹介できる関係になります。昔はそういう風になっていたはずで、八百屋さん、肉屋さん、豆腐屋さんと巡って買い物をして、「隣の豆腐は今日出来がいいみたいよ」と肉屋が言ったりするわけです。

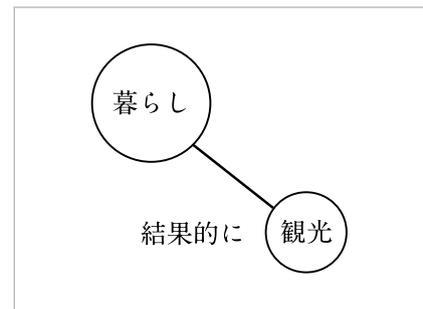
それから、安心して参加できる仕組みがあります。メンバーだとかメンバーじゃないだとか、そういうことは自分の頭の中でまちを旅館と見立てるだけなので関係ありません。まちには多様な価値が存在するという前提にして進めていかないと、偏ってしまいます。例えば、夕食を買いに行きたいおばあちゃんが、洋服屋ができたよと言われても嬉しくもなともない。人によって価値観や暮らしは様々ですから、自由に選択できることがとても大切です。



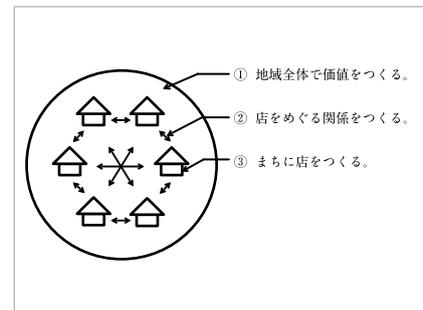
一軸連携



多軸連携



観光地を目指さない



面、線、点のレイヤーで価値づくり

そして、**まちを意識するきっかけ**になります。自分のお店をやっているとそのことばかり考えがちですが、自分より大きい物に見立てると、そこに向かって意識が広がり、ひとりひとりがまちを意識して行動するきっかけになります。

最後は、**日々の暮らしからまちが良くなる**こと。まちのことだけを頑張るようにしないようにしています。みんな普段から生活し、店を経営している。それが結果的にまちのことになるということが理想です。健康な人が健康法を気にしないように、**いいまちはまちづくりを気にしない**わけです。

ですから、まちぐるみ旅館に組織はありません。各店それぞれ日常の運営をしていて、友達のような関係です。そもそも組織の必要性がないし、自由な自立と連携があればよいからです。自分の意思で旅館と見立てるかどうかも決められます。また、補助金も使っていません。個人的なことに税金を使わないように、まちに対してもそういう気持ちを持つべきだと思っています。継続性がなくなる、内容を擦り合わせるといった補助金の弊害もあるのでできるだけ使わずに、自分たちのまちを継続的によくしていくという気持ちを持つことが大切です。

■ まちを「盛り上げ」ない

10年後の目標は、いい店がたくさんあって、それぞれ自立的な連携ができていて、みんな仲良く居心地がよい状態です。これはごく当たり前のことで、健康的なまちはこうあるべきだと思っています。**「まちぐるみ旅館」という見立ても必要ない、ふつうのまちでありたい**です。

その時に大切にしたいことは、**まちを盛り上げない**ことです。まちをメディア化したり、プロモーションしたりすると必ず盛り下がるので、流行はつからないほうがよいのです。商品と違って、まちには終わりがないので終わらせないようにしなくてはなりません。身の丈に合った情報提供をすることを心がけています。

どんな人に来てもらいたいかということも非常に大切で、にやにやできる環境をつくりだせる**生産者がいないとまちはよくなりません**。基本的にプロモーションや盛り上げでやってくるのは消費者です。消費者が必要ないというわけではなくて、**生産者がちゃんとコンテンツをつくって、身の丈に応じて消費者が来るという順番が大切**です。そういう健康的な消費者と生産者の関係がまちをつくれますし、「今、仏生山が熱い」「仏生山が盛り上がっている」「おもしろい人が集まっている」「香川のホットスポット」といった言葉は禁句にしています。静かに価値をつくり、むしろ盛り下げるぐらいの感じです。

みなさんも、今日から「自分のまちが旅館だ」と言ってみてください。まちを変えるのではなく、まちの見方を変えることから始めて、その結果まちがよくなるようにしたいと思っています。

健康な人が健康法を
気にしないように、
いいまちは、
まちづくりを気にしない。

いいまちはまちづくりを気にしない

静かに、静かに、
まちに価値をつくっていく
ことが大切。

なんならもり下げるぐらい。

(地域の地理環境、状況によって異なる)

大切にしていること

ゲスト講師②



建築家 谷尻 誠氏

1974年広島生まれ。2000年建築設計事務所 SUPPOSE DESIGN OFFICE 設立。共同代表の吉田愛と、広島・東京の2ヶ所を拠点に、住宅、商業空間を始めとする様々な分野で、国内外で多数のプロジェクトを手がける。現在、武蔵野美術大学、昭和女子大学等で非常勤講師を勤める。著書に「談談妄想」「100%の建築」がある。

■ 違和感を大切に、物事の本質を考え続ける

私の場合は、ドンとひとつ盛り上がると小さなことも同時に引っ張られて盛り上がるということも起きるので、大きいからできることと小さいからできることという役割があると思っています。

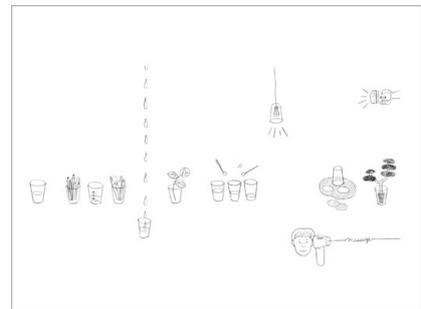
私は物事の捉え方を大切にしています。ある時、名前が世の中を支配しているということに気がつきました。例えば、コップのようなものがあると、我々はコップだということを知っているので、飲み物を飲む道具として日々使います。言い換えると、コップ以外の使い方をしなくなっているとも言えます。花を入れれば花瓶、魚を入れると水槽と呼べます。他にも鉛筆立て、カトラリー入れ、雨漏りを受ける、植木鉢、楽器、ランプシェード…。名前があるから機能をひとつにして使っているというのが僕らの日常です。

逆に、名前をつければいいこともあります。郵便ポストが家になくても、段ボール箱に「ポスト」と書けば、郵便屋さんはその間に郵便を入れ始めるでしょう。我々がイメージするポストの姿は、今まで生きてきた中で見てきたポストの経験が決定しているだけで、本質的な機能を考えることは日常においてはあまりないのではないのでしょうか。

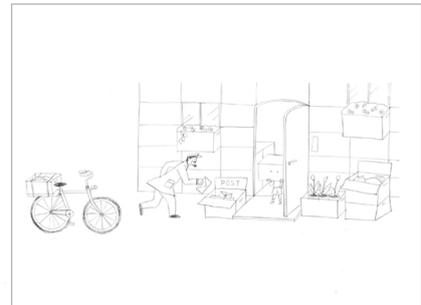
これは、あらゆるものを設計するときにも考えていることです。カフェを設計してくださいという依頼を受けたとすると、カフェというのはそもそも何なのかを考えるとところから始まります。そのためには、一度名前を取り除いて、カフェというものがなかった時代に遡ってみます。

もうひとつ大切にしていることは、違和感です。例えば、シャンデリアも駐車場も知っているはずなのに、駐車場にシャンデリアがある風景は新しいですね。新しいものや、人が感動したり驚くものは、知っているけど見たことがなかったものにあるのではないのでしょうか。こんな風に、人がどういうときに感動したり喜んだりするのかという本質的なところを考えて、設計の中に取り込めないかを模索しています。なんとなくただみんながやっていることが答えになりがちですが、それが本当に正しいのか、そもそも問題設定が正しいのかという問いから始めるように心がけています。

私の広島の事務所は、80坪の古いビルを借りて、40坪のオフィスと



「名前」を外し様々な機能を考える



名前をつければ「機能」が生まれる



どちらも知っているのに新しい風景

40坪の空っぽの部屋をつくり、発泡スチロールを40cm角に切り抜いて、100個ばらまきました。人が座れば椅子になり、板を上に乗せれば什器になり、終わって隅に積み重ねると壁になります。これを利用しながら、月に1回THINKというイベントを開いています。私が外で仲良くなった面白くて有名な人を呼んでいます、元々は私が事務所の外で出会った人にインスパイアされ、事務所スタッフにも知ってもらいたくて呼んでいて、それをまちの人にも開き始めました。アーティストの作品を置いたときはこの空間がギャラリーという名前になり、ミュージシャンが来てくれた時はライブハウス、フードデザイナーが来てくれた時はレストラン、落語をしてくれた時は寄席、という風に来てくれる人によって空間の名前も自在に変わります。

その他に、これまでの私のプロジェクトを紹介します。この住宅は、屋と廊下の境目を模索し、部屋とも言えそうなくらい広くて明るい廊下をつくりました。そうすると、子どもがこの廊下で遊び始め、全ての部屋が明るくなりました。

大阪・南堀江にある商業施設「ビオトップ」では、インテリアデザインを担当し、敢えてコーヒーショップの座席を街に出しました。コーヒーを飲みに来た人たちがどんどん街に出て、人がたわむれ、それを見てまた人が集まってきます。3階にレストランがあってコーヒーも飲める場所をつくと、人は待ち合わせでまずここにきて、コーヒーを飲んで、街へ繰り出していくという、街のエントランスになりました。

オーストラリアのキャンベラのホテルでは、地元のアーティスト20組と設計者がセットになって客室をつくり、全体のディレクションをしました。それぞれの部屋を様々なアーティストがつくることで、次は違う部屋に泊まってみたいと思える場所になりました。

私自身は、統一されていてシンプルでキレイでわかりやすいということよりも、とても複雑だけどシンプルなものが好きです。例えるなら、白い紙にいろいろな出来事や発見などをたくさん書いていくと、最後には黒になりますよね。設計においても、そういうシンプルさを目指したいと思っています。

東京にある事務所では、広島の実務所とは違った試みをしています。設計を頼む人でなくても気軽に来れる事務所にしたかったので、事務所の中にカウンターをつくりました。オープニングのときはバリスタに来てもらって、エスプレッソとサンドイッチを出すカフェにしました。事務所のエントランスがカフェになったりバーになったり本屋になったりすれば、様々な人が来れるようになります。

アートのインスタレーションや、ファッション、グラフィックのプロジェクトもあります。「文芸フェス」のダイレクトメール(DM)を作った時は、文芸なので本にちなんだ文章と、オーガニックのドライマンゴーを入れました。ドライマンゴーに食べられるインクで日時を印刷しました。来場者は当日、これを持参し、ワインとビールを飲んでドライマンゴーを食べながらその場をシェアし、DMは役割を終えてもゴミになら



「THINK」の会場



広くて明るい廊下を持つ家



コーヒーショップの座席を街に出す



様々な人が訪れやすい東京事務所



日時を印刷したドライマンゴーのDM

ずにお腹の中に消えてなくなりました。

尾道の「U2」の時は、尾道について調べるにつれて、尾道は日帰り観光の町だと言われていることがわかりました。それはつまり、そこで土産を買わないということです。滞在時間を延ばすにはホテルが絶対に必要だと考えました。また、地元の人に使ってもらうためにはパン屋さんが必要になりました。古さの中に新しさがあるような「懐かしい未来」というテーマを掲げ、地元の人がこの場所を自慢し始めるような状況を生むことを考えながら設計しました。「HOTEL CYCLE」という名前のホテルは、その名の通り自転車で泊まれるホテルです。私も経験があるのでよくわかるのですが、高い自転車を持っている人にとっては自転車を町中に停めておくのは落ち着かない環境になるので、室内に持って入って自転車も一緒に泊まれるようにしました。また、部屋の前の廊下を広くして自転車整備ができるように縁側のような場所をつくり、自転車好き同士がコミュニケーションを取れるようにしました。環境についても、この場所に一番合う空調を考え、湿度コントロールをしてエアコンは補助として使う仕組みにしました。ほとんど嫌な風が来ないので、春や秋の心地よさを倉庫の中につくり出せます。他にも設計事務所がやらなくてもいいことですが、オリジナルの照明や商品をつくったりしました。プロジェクトをフェスティバルにすべく、自分たちだけでやらずに、色々な人を巻き込んでいます。いいものを使えば何でもかっよくなるというわけではなくて、どうやって使えばかっよくなるのかということ丁寧丁寧に考えていながら、U2の価値をつくっています。

■ プロでありながら素人であり続ける

こうした様々なプロジェクトをやるにつれ、何も決まっていなかった相談が来るようになりました。ここに建物があるけれど、何に使ったらいいかとか、敷地をどう活用したらいいかとか。設計というのは通常、何に使うか決まってから話が来るのですが、様々なところに触手が伸びている分、ファッション的な視点の依頼や、企画、デザインコンサルティングの依頼といったものも来ます。なぜそういう状況になったかと言うと、一番根っこにある本質的なものをずっと考えていることと、とにかくあらゆることに初めてのように取り組んできたからかなと思います。初めてのことはばかりなのでとても大変ですが、初めてだからこそ思い付けることや、専門でないからこそ専門を上回れることがあると信じています。

私はプロでありながら素人に戻るために、名前というものを取ったり付けたりしながら、世界にあるものをフラットに見て、いろいろなプロジェクトができたらいいなと思っています。みなさんも何かをやる時に、既にあるものと比べると自分のやろうとしていることが劣っているように思えることがあるかもしれません。しかし、それは劣っているのではなくて今までにないものが作れるチャンスを持っている状態だとも言えます。その状況を存分に活かして、面白いプロジェクトをまちに散りばめて、魅力的な広島をつくっていったらいいなと思っています。



海運倉庫を改修した複合施設「U2」



自転車整備ができる縁側



ホテルのオリジナルノベルティ

2 トークセッションと質疑応答

西上ありさ 氏



お二人のお話を聞いていると、事務所とカフェ、事務所と古本屋など、ひとつの空間を複数でつかう点が共通していると思いました。また、キャラクターは対照的ですが、盛り上げるのと盛り上げないのと上手に使い分けると、魅力的なまちができてきそうです。結果として、シンプルなことが最終的に伝わってこればいいと言う点も同じですね。

- 「まち」は意識的に平仮名でつかっているのですか？

「まち」は漢字にすると 2 つくらいありますよね。意味が重なったり確定したりしてしまうので、より広がりを持たせたくて平仮名でつかっています。「つくる」も同じように、平仮名でつかうようにしています。

岡 昇平 氏



- 身の丈でやるけれど、全く知られないのも困ると思います。そのあたりはどうされているのでしょうか？



宣伝は全くしていないわけではありません。ただ、身の丈に合った宣伝をして、ちゃんとした情報をちゃんと受け取った人に来てほしいと思っています。実力以上にアピールするとプロモーションになり、そうした思いとは関係なくどんどん人が来てしまいますので。

- 生活の延長上で、住んでいる人がいいと思っている状態を、外から来た人も楽しめるように少し開いている、ということのように感じました。

僕は、住民と観光客を分けずに考えています。人が楽しめるものは、地元の人でも観光客でも関係なく楽しめると思っていますし、観光客だけのために何かをすることはまずありません。まず暮らしている人たちがそこで楽しんだり美味しいものを食べたりできる状況をつくって、自分たちが楽しんだ上で、それが美味しいからといって他の地域から来てくれることを観光と呼ぶのであれば、それが観光になるかなと思います。



- お金の当てもないのに形にできるか不安に思うこともあります。



基本的にはまちぐるみ旅館だよと言っているだけで、あとは運です（笑）誰でもできます。谷尻さんの U2 がわかりやすいと思ったのは、消去法で選ばれがちな宿泊場所をメインコンテンツにすることで人が来るということが実証されていますね。そういう場所をつくれば、あるいはそういう場所を拠点にいくつかつなげていけば、本当に泊まってくださる方もたくさんいる気がします。

谷尻 誠 氏



何もなくても始められます。今たまたま広島の実家を改装しているのですが、そこに時間を割けなくて解体したまま5カ月くらい止まっています(笑)でも、一部屋和室を残して解体したのですが、よく考えたら泊まれるなあと思って。電気も水もありませんが、寝る場所はある。自分たちがやりたいことに一番何があればいいのかを考え、見つけ出せば、電気がないならキャンドルでやれば、「あそこキャンドルのお店なんだよ」というのが見つかるかもしれません。皿が一個しかないとか、本が一冊しかないとか、世の中と逆のことが魅力になるという可能性はいつも潜んでいると思うので、何かがないとできないと思わずに、どうやったらできるかという気持ちが大事です。

□ さらに自分たちのプロジェクトに仲間を増やしていきたいと思っています。

THINK をやる上で「オファーしない」ということを決めています。有名な人にオファーすると、話が面倒になって経費がかかるルートしか辿れなくなるので、基本的には仲良くなった人しか呼んでいません。仲良くなった人に話をして、「行ってみたい!」と言ってくれたら「来てもいいよ」という風に言っています(笑)この人と何かやってみたくとか、この人の話を聞いてもらいたいというように、自分の好きなことを職権乱用してやったほうが世の中のためになるんです。そうやって、自分の好きなことを武器にすると思います。



チームをつくったり、メンバーでやるときに大切にしているのは同じ方向を向けるかどうかということです。セルフビルドの効果の中でも一番大きいのは、同じ方向を向いてもものづくりができることです。普通は工務店・設計者・施主の3者でやりますが、セルフビルドではその全てを自分たちでやるので、儲かるためではなく、とりあえずいいものをつくろうとなります。そうすると、クオリティも上がるし、みんなも仲良くなるし、かつ色んな空気がつくられ、いいアイデアが出たり、越境した職能の効果が出たりといったことがあります。あと性格がいい人、人当たりがいい人、もめない人がいることも大事ですね(笑)

「人生90年時代」と呼ばれ、定年してから30年くらい生きなければならぬ現代で、歩いて行ける場所にいろんなものがある、それを心地いい仲間と共有できているということはすごく大事だなと思いました。今みなさんが頑張っていることは、将来の自分につながっていることなんです。そして、これがなければできないとか、この状況だから自分にはできないと思うのではなく、見方を変えてどうしたらできるだろうと考える姿勢をお二人から学べたのではないかなと思います。これらを続けて、みなさん自身が楽しんで、地域もよくなっていくプロジェクトになっていくといいですね。岡さん、谷尻さん、ありがとうございました!



3 意見交換「立って座ってメガホン会議！」

前回に引き続き、参加者のみなさんそれぞれの活動を知れる場としてメガホン会議を実施しました。お互いの共通点を見つけて、「相乗効果」あるいは「相互補完」が生まれることが「連携」です。つながりを広げたり深めたりしていくことと同時に、自分自身が提供できる魅力についても磨き、他の人に伝えられるようにしていきたいですね。

■ 今回の発表者のみなさん

A	—	諏訪修三 平井啓子 (まちづくりコミュニティ デザイン研究所)	末本尚吾 (道の駅みはら)	市川育夢 (シェイクハンズ)
B	円光 歩 (みんなと島のおみやげを つくりたいんよ)	新本直登 (忠海地域文化 伝承協議会)	山本剛志 長尾 歩 (くれシェンド)	松本陵磨 (忠海港回漕店)
C	—	藤井真夏 (マリンパーク海族)	山田浩司 (Y51 by the sea)	—
D	渡辺幸三 (福山市ふるさと 資源活用推進員)	勢良寛 岸健太郎 (のろしりレー)	永幡樹里 (大崎上島 地域おこし協力隊)	村上記雄 (内海町の将来を 考える会)
E	岡本礼教 (えたじま手づくり市)	田中政敬 (三原市佐木島 地域おこし協力隊)	—	吉宗五十鈴 (世羅高原 カメラ女子旅)
F	山崎八生 (瀬戸内しまのわ 春まつり in 中島)	久保淳史 (竹原・呉ガイド)	井上 啓 (道の駅たかの)	上野奈苗 (やまカフェ)

■ 印象に残った話

藤井真夏さんはどどんとトライしていて、とても印象的でした。

未来の話をするのに年配者の話が中心になり、若い人の話が通らないという悩みに共感しました。

自分たちの活動を続けていくためには「やらない決断も必要」という言葉が強く残りました。

山田浩司さん、吉宗五十鈴さん、田中政敬さんのお話。

新本直登さんを応援したいです！

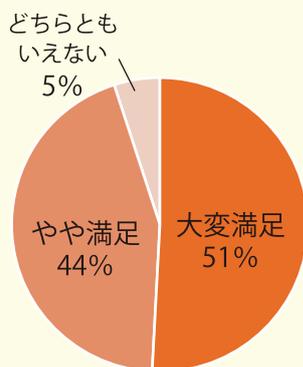
道の駅の話、とても聞きたかったことでした。少人数のイベントも気軽に再々出来るし、ぜひやりたいと思います！

大崎上島の手ぬぐいのお話、とても素敵な活動だと思いました。地元の人が使っている所を見られるようになるといいなと思いました。

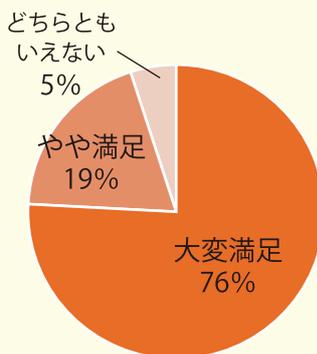
みなさん、楽しみながら活動されていて、生き生きとした表情がとても印象に残りました。

4 参加者の声

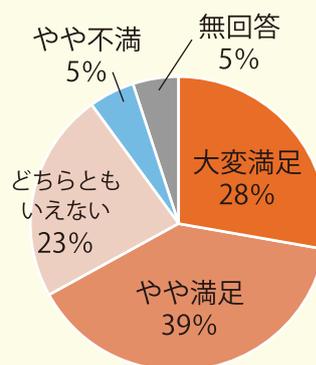
各プログラムの満足度について、参加者のみなさんからのアンケート結果は下記の通りでした。



シゴトスクール全体の満足度



講座の満足度



メガホン会議の満足度

- 講演について もっとも求めているテーマだった／具体的に長期の活動をされている講師の方の詳しい話を聞いて良かった／「まち」を変えるのではなく、「まち」の見方を変えるというスタンスはとても大事だと思った／観光客を沢山呼ばなくてはいけないと考えるのが苦痛だったので目からウロコだった／「身の丈に合った」という言葉に救われた
- メガホン会議について みなさんの生の話をしっかり聞いて良かった／普段つながることができない人たちとつながることができた／いろいろな発想が聞いて良かった／悩みや課題をきけて良かった／事前に発表者の情報がもう少しわかると良かった／欠席が結構あったのが残念だった

5 次回は1月30日(土)です

会場 広島県庁自治会館
時間 13:30 ~ 17:30

次回は「地域の課題を解決するシゴト」というテーマで、issue+design の寛裕介さんをゲストにお呼びします。地域の課題解決を「シゴト化」していくためのヒントを学びます。

issue+design 寛 裕介

1975年生まれ。hakuodo issue+design 代表。著書に『人口減少×デザイン』『地域を変えるデザイン』『震災のためにデザインは何が可能か』など。「できますゼッケン」と「親子健康手帳」は2011年グッドデザイン賞を受賞。コミュニティトラベルガイドなどの編集にも携わる。



懇親会を開催します！

シゴトスクール終了後に、懇親会を開催予定です。詳細は、メールや Facebook グループ等でお知らせいたしますので、ぜひご参加ください。

- 場所：広島市内（予定）
- 時間：19時～21時（予定）